

## P10-85

小児看護学の講義に幼児前期対象理解演習を取り入れて

姫路赤十字病院 姫路赤十字看護専門学校

○柳 めぐみ

平成21年度よりカリキュラムが改正になり、看護実践力の向上が求められている。本校においても科目内容、教授方法の検討を行い、教師主体の「教える」から、学生主体の「学ぶ」への移行をめざしている。学生の成長を促すために、日々の授業が重要であり、安永1)は活動性の高い授業を行うことで、学生も教師も共に変化・成長できると言っている。活動性の高い授業とは、学生が仲間と積極的に交流しながら、学習過程に深く関与し、学びを自己と関連づけ、自他の変化と成長を喜びあえる授業であるという。今回、小児看護学に、「幼児前期対象理解演習」として、実際に幼児とその母親にかかわる演習を取り入れた。小児看護学では成長・発達の理解が重要であり、従来もビデオ等の視聴覚教材をとりいれ、イメージ化を図ってきた。しかし、映像は、時間が経過すると忘却しやすいため短所も持っている。6名ずつのグループをつくり事前学習を行い、当日に決定した2つのグループが演習を体験し、他の学生はビデオ撮影で同時に見学した。最初、学生は遠巻きに幼児に声をかけていたが、少しずつ一緒に遊べるようになった。母親への声かけや情報収集までは余裕がない様子であった。演習後、グループで幼児と母親のイメージマップを作成、クラス全体で共有した。アンケートに学んだ内容を記載してもらった。学生は、幼児の成長発達、関わり方等を生き生きと学んでいた。この方法ではすべての発達段階を教えることはできない。しかし、学生がグループで仲間と交流し、学ぶことを楽しいと感じ、興味をもつて学びを広げることが大切であり、教師は学生と共に学ぶ存在であることを再確認できた。引用文献 1) 安永悟:活動性の高い授業の実現に向けて、看護教育、51(4)、p316、2010

## P10-87

病院フェスタ(看護学校部門)を開催して

姫路赤十字病院 姫路赤十字看護専門学校

○松井 里美、樺山 たみ子

平成20年度に姫路赤十字病院が、平成21年度には姫路赤十字看護専門学校(以下「学校」という。)が創立100周年を迎えた。100周年記念事業の一環として平成21年3月14日(土)に病院フェスタが開催された。病院フェスタに合わせて、学校を地域住民に開放した。昨年に続いて、今年も5月15日(土)の病院フェスタに合わせて、学校も参画した。主な催しは、1)模型に触れてみよう 2)肺の音を聞こう 3)手洗い体験 4)老人・妊婦体験 5)日本赤十字社看護教育120周年記念展示コーナー 6)絵本コーナー 7)おもちゃコーナー 8)コーヒーコーナーであった。学校の催しに参加されて、アンケートに答えてくださった方は大人400名、こども328名であった。昨年も学校のフェスタに参加された方は大人12%(41名)、今回が初めてという方が88%(359名)、こどもも昨年も参加された方は15%(49名)、今回が初めての方が85%(279名)であった。大人は模型に触れたり、聴診器で肺の音を聴くコーナー、コーヒーコーナーに人気が集まった。こどもは赤ちゃんのモデル人形を抱っこするコーナーに断然人気があった。その他、グリッターバグ(手洗い検知器)による手洗い後の洗い残し検査コーナーや歯磨きモデル人形「せいけつくん」コーナーにも高い興味を示した。自由記載では、看護学生がどんな勉強しているのか分かったとか、以前から看護学校に興味があった、ボランティアの学生が親切だったなど、好意的な意見が書かれていた。こどもの中には、ここで看護の勉強がしたいという意見も見られた。学校を地域の人たちに開放するフェスタは、赤十字や看護学校への興味関心を高める効果があるといえる。特にこどもの頃からこのような体験をすることは、将来の職業選択にも大いに役に立つと思われる。

## P10-86

当校学生の精神健康状況～アンケート調査結果からの学年比較～

石巻赤十字看護専門学校

○後藤 ひろ子、森岡 薫、岩佐 郁子

看護学生の多くは、ストレスを抱えながら毎日を送り、精神の健康に大きな影響を及ぼしている。中井氏は「精神の健康とは精神の健康を危うくすることに対する耐性」であり、複数の対処能力を上手く活用することができれば、日常のストレスに対処できると述べている。そこでそれらの対処能力を参考に14項目を設定し、当校全学生を対象にその対処能力の有無、対処能力に影響を及ぼすと考えられる世帯状況・仕事経験・サポートの有無の状況についてアンケート調査を行った。その結果、低い対処能力は、「問題を局地化する能力」「物事をポジティブに考える能力」「即座に解決を求めない能力」「現実対処能力の方法を複数持つ能力」であった。その中で学年間の差が無いのは「問題を局地化する能力」「物事をポジティブに考える能力」であり、学年間の差があったのは「即座に解決を求めない能力」で、特に3年生が低かった。「現実対処能力の方法を複数持つ能力」では、学年が進むにつれて対処能力の割合が高かった。問題を局地化する能力が低い状況の中で、現実対処能力を複数持ち合わせていない状況に加え、即座に解決を求めずにはいられない学生の状況が考えられる。そのため、物事に対する取り組みの姿勢が消極的、悲観的になりやすいのではないかと考えた。この悪循環を早期に発見し解決するようなサポートが必要である。また、仕事経験の有無はこの対処能力に幾分影響を与えていたが、世帯状況・サポートの有無の状況については、差が見られなかった。サポートがあっても、それが効果的に作用していない現実があるのでないかと考えたが、今回の調査では明確にすることができなかった。この点については今後の課題と考える。

## P10-88

外国人看護師候補者の受け入れについて

足利赤十字病院 看護部

○ガメット ラリン エヴァー、鷲見 圭司、加藤 君江、小松本 悟

日本との経済連携協定(EPA)に基づいて来日したフィリピン人看護師候補者ラリン・エヴァー・ガメット(34歳)は、足利赤十字病院での研修をわずか5ヶ月という短期間で難問を突破しました。他の赤十字病院でも外国人看護師候補者を受け入れており、合格を目指す多くの外国人候補者への参考として当院での教育プログラムについて述べたいと思います。(1)独自の教育プログラムとは:EPA初のフィリピン人看護師として多くの新聞、メディアが取り上げられたことは、当院が社会から信頼を得たのではないのでしょうか。私は、フィリピンの看護大学を卒業後にフィリピンで6年間の看護経験をし、その後サウジアラビアの病院(救命救急センター)で5年間勤務したという経歴を持っています。日本語研修を終了後、昨年10月下旬に足利日赤勤務となりました。足利日赤独自の教育プログラムに則して看護師国家試験に準じた医学用語の漢字、カタカナ、用語を中心に勉強しました。昨年の10月下旬には、日本語検定3級に合格し、12月下旬には、日本語検定2級相当の実力がつきました。病院に来てからは、午前中は外来に付いて、診療の仕方を含め国家試験に出る疾患を中心に英語と日本語で教育してもらいました。午後は、医師、看護師、事務員の計10名の教育スタッフが交代で、プログラムに準じて看護師国家試験を中心に教育を受けました。(2)EPAの課題、問題点(院長コメント):フィリピン人看護師は国家試験で、今回来日した候補生のうち、エヴァー1人のみという結果が多額の課題と問題点を浮き彫りにしたかと思えます。私共の病院では、7:1看護体制をとっております。政府の方針もありますが、今後病院も含めた医療現場では、国際化がもっと加速すると思っておりますので、優秀な外国人看護師を増やしていきたいと考えております。